

真鶴町後期基本計画の将来像2028

小さくてのんびりだけど、実は最先端。

昔から変わらないけど、新しい。

スマートタウン真鶴

1.歩いて暮らせる町

旧岩村と旧真鶴村の境界付近である駅前や役場・診療所周辺に都市機能が集約され、そこを複数系統のコミュニティバスがぐるぐる回って、気軽に出られます。歩いて15分以内で、日常生活に必要な一通りのサービスが受けられるようになっていきます。現在、世界の潮流となっている「15分都市」「ウォークアブル・シティ」「コンパクト・シティ」を実現しています。

2.いきいきお出かけし人とつながる町

町民活動支援拠点であるコミュニティ真鶴を中心に、町民による自主的な活動が様々に展開され、社会参加が活発な町となっています。

イタリアのアマルフィもまた真鶴のように坂の多い町ですが、人々はバル（居酒屋兼喫茶店）に集まってカフェラテやワインを飲みながら仲間とおしゃべりを楽しむために毎日坂を上り下りし、それが結果として健康づくりにつながっていると聞きます。このように、社会参加を促し、外出機会と社会関係資本を増やす仕掛けが町のあちこちに埋め込まれています。

3.みんなで分かち合う町

真鶴町では車を持つ必要がありません。ちょっと歩けば使える車も自転車もあるからです。ちょっとしたお出かけには、汐風を感じながらサイクルシェアがいい気分。家族と一緒に出かけるときには気軽にカーシェア。自家用車を持たないので、庭や家も広くとれます。MaaS とかいう名

前の定額使い放題サービスで、町内ならバスもカーシェアもサイクルシェアも乗り放題です。

4.情報を活かして町民需要に応える町

真鶴町では高齢者もみんなスマホを持っています。使い方がわからなくても大丈夫。一種のカードのようなものとして持ち歩いています。お買い物もバスの乗り降りもこのスマホをかざしてピッとカンタンです。このスマホには、防災無線の情報も聞き取りやすい音声で流れてきますし、町から通知が来て毎日の安否確認もできます。登録すれば、薬の飲み忘れ防止の通知も、ゴミ出しのお知らせも来ます。こうした行動の記録は、個人が特定できない形でデータとなって実証実験に用いられ、町の施策にも活かされます。お出かけして活動をするごとに真鶴ポイント(仮)が溜まり、真鶴 Pay(仮)としてお買物にも使えます。

5.にぎわいと生活の場をすみわけする町

観光戦略ゾーンと位置づけられた岩海岸と真鶴半島の魅力が、どんどん発掘され発信されています。岩海岸と琴ヶ浜は海遊びの拠点となり、お林と三ツ石を抱えるケープ真鶴は、森と海の自然体験が両方できる場所として、県内外から学習旅行のバスが増えてきました。お林展望公園や真鶴魚座は、新しい発想の民間提案と民間投資を受け、新装一転しています。

琴ヶ浜～ケープ真鶴～お林展望公園には、お林循環の無人運行の電気バスが走っています。CO2ゼロでお林ブランドも更に向上しました。

その他の居住生活ゾーンは、こうした観光戦略ゾーンとゆるやかにつながり、落ち着きは維持しながら消費の面では還流を受けています。

6.眺望をたのしむテレワークの町

コロナ禍以降、真鶴は恵まれた眺望と環境を求めて人が集まる町となっています。こうした

人々を応援するため、町もテレワーク拠点を整備し、働く人同士のゆるやかなコミュニティも生まれています。経済面でも活気を取り戻しつつあります。職住近接で生活満足度が高いことが功を奏したのか、出生数も微増に転じました。

7. 駅前が交通結節点と広場になる町

東海道線によって町が南北に分断されて行き来しにくい問題も、いよいよ解消に向けて動き出しました。駅前再開発事業に着手がなされ、駅直結の複合施設と併せて線路をまたぐ道路が整備される予定です。同時に、駅前の変形交差点も改良され、交通事故も大きく減っています。そして、駅前には広場が整備されました。何もなかったかわりに、週末ともなると市場が開かれたり催しがあったりして便利に使われています。

8. 町役場が土地活用を後押しする町

これまで、真鶴町に住みたい人は多いのに物件が出回らないことが人口減少の大きな原因でした。一方で空き家は多く、実に15%以上が空き家です。そこで「真鶴版ランドバンク」を立ち上げ、土地の流通や再開発を支援し、区画ごとで電気を貯留して供給する仕組みや住宅の省エネルギー化も進めています。民間では手間とコストに見合わず活用されなかった地区の再生を進めた結果、転入者が増加傾向にあります。

9. 町役場が光熱水費を下げてくれる町

古くて効率の悪いエアコンや冷蔵庫を買い替えば、電気代が安くなり、長い目では家計負担は減ります。屋根にソーラーパネルを載せれば、電気の消費量も減り、逆に売電収入が得られます。そこで、町が家計の光熱費や通信費等の見直し相談を受け付け、町民のおせっかいを焼く事業が始まりました。ESCO とかいう方式で町が初期投資をして家電の買い換えを行うほ

か、県の「0円ソーラー」事業を活用してソーラーパネル設置もお手伝い。固定電話から町が紹介するスマホへの置き換えも進んでいます。

10. 二十一世紀型スキルを育む町

町内の小中学校は、いわゆる偏差値にばかり偏重した教育から距離を置き、公立校でありながら、新時代に求められる能力を伸ばすことに注力する町として注目を集めています。

とりわけ、建替え中の小中一貫校はZEB仕様で建設中であり、魚つき保安林も活かした特色ある環境教育により自然体験から育む感性(センス・オブ・ワンダー)の町として知られています。

11. 生涯学ぶ楽しさを味わえる町

学ぶことは、楽しいものです。だから真鶴では老いも若きも学ぶことに積極的です。現役世代は仕事に役立つ職業能力開発(リスキリング)はもちろん、余暇でも新しいことに挑戦する喜びを味わっています。高齢者は無理のないペースで働きながらも、町民活動支援拠点のコミュニティ真鶴を中心に催される様々な企画を楽しんでいます。生涯学習、生涯現役の町となっています。

12. 芸術家の足跡と物語が豊かな町

真鶴では町中に作品が点在しており、それらを紹介するテーマごとの地図なども数多く作られて、町歩き型の美術館(ルート・ミュージアム)の町として知られるようになってきました。元々、芸術家が風光明媚な環境を求めて移り住む土地柄だったことに加え、地元で作品を生み出される仕組みもあります。現在では、町有施設や民間の空き家を改修して、芸術家が滞在しながら創作活動を行う拠点(アーティストinレジデンス)として使われるようになってきました。くらしの中に芸術文化がある町として、関係人口の増加にもつながっています。